

「落語と私」 その六

三代目 橘ノ百圓

三、殿様団子

この噺は、式月号にも書きましたが、あのジェスチャーでお馴染みの、柳家金語楼先生（何故か、金語楼師匠は先生と呼びます）の作品で、時代は※維新が成り、廃藩置県、廃刀令、断髪令と江戸から明治へと激しく移り変わる、武士を必要としなくなった時代の、士族の商法の噺の一ツです。

「あらすじ」

大名と呼ばれるのは、一万石以上の禄高を持った者ですが、やはり「井の中の蛙、大海を知らず」の通り、世情に疎い一万石の大名・大障子家の殿様も禄を奪われ、僅かな分配金で、何か商売をしようと、出入の職人、源太を呼びつけ、殿様が町方を探索したおりの気になる商売を訊くのですが、何しろ、殿様と職人では、まるで会話が噛み合わない有様。火の見櫓の隣の西洋館の二階建、あれは何か？と訊くと、源太が「エー、アッ！あれは警察でございます」と、殿様は「何、警察とナ！？どうじゃ、あの商売は儲かるか？」テな具合、呆れた源太、早目に引き上げた方が得策だと、殿様が国表で月見の宴を催した時に、下臣達に振る舞った殿様お手製の団子、これを商売にしたらと散々煽って帰ってしまう。殿様は、早速手頃な空家を求めて開店の当日、源太に勧められた職人二人がご来店。威勢良く中に入るも、対応に出た家老の三太夫に「何か用かな！？」と言われたり、ごく立派な衣裳を着けた殿様が出て来て大慌てをするやら、仕舞には、指の跡の付いた餡団子や、唐辛子の入った蜜団子を食べさせられたりで大騒ぎ、落げば、梅干の入った団子を食わされた八五郎が「アッ！酸っぱい、何ンでえ中ア梅干じゃねえか」と、殿様が「予の作った団子が不服か？」と訊かれた八五郎「イヤ、中なか粋（酸い）な味」。楽しい噺です。これを高座に懸ける噺家さんが何人いるかは、私は分かりませんが、受け継いで貰いたい噺の一ツです。

「扇馬師匠の説明」

殿様団子は、金語楼先生が四代目圓馬の為に書いた噺だと聞いています。それを受け継いだ訳です。やはり、殿様、家老、職人の口の利き方、手の位置、胸の張り方を厳しく言われました。又、団子の食べ方も、餡団子は甘そうに、そして、中に細かな砂利や藁くずが入っているので、それを舌先で口から出す仕草、唐辛子が入った蜜団子を食べた時の大袈裟な顔と体の動き等を教わりました。今、小文治師と圓馬師は受け継いでますので、寄席に行きましたら「殿様団子」と声を掛けてください。

四、長短（気の長短）

落語好きな人なら、必ず聴いた事の在る噺で、寄席でもよく懸ります。「十人寄れば気は十色、杉は直ぐ松は歪みて面しろし、人の心は奇なり奇異なり」で始まります。気の長い人と短い人の登場する滑稽噺です。

「あらすじ」

気の短い短七さんの所へ、気の長い長吉さんが訪ねて来る処から噺は始まります。先ず、長さんが扉越しに何度も覗き込んでいる、短さんに早く入る様にと促され、漸く中に入った長吉さんは、今日の雨

を、昨夜の小便から言い出すほどの気の長さ、この様な事は馴れっこの短さんは、美味い菓子（饅頭）を食べる様に勧めるが、長さんは、半分に割った菓子をいつまでも、クチャクチャと食べる始末。見かねた短さんが残りの菓子を取り上げ、二回ほど噛んで呑み込んで仕舞テな有様。長さんは煙草を取り出し、煙草盆で火を点けようと何度も挑戦するが、火が点く様子は無く、イライラした短さんが「そんなこっちゃ、生涯火なんざ点きやしねえや！雁首に煙草を詰たら、口の方からお迎えと行くんだお迎えと、こう言う風に出来ねえのかヨ」、これでやっと煙草に火の点いた長さんが「短さんは、気が短けえくらいだから、他人からものを教わるのは、嫌えだらうネ！？」、「アァ大嫌えだヨ」、「俺が教えてもかい？」、「否、お前えは別だヨ、餓鬼の時分からの友達で（略）」、「やっぱり怒りそうだから」、「怒らねえヨ、頼むから教えて呉ヨ」、「なら言うけど、確か短七さんが三服目の煙草をポーンと叩いた火玉がねえ、煙草盆の中に入えらねえで、左の袖口から袂の中に入えちゃってサァ、おやおや大丈夫かなあと思って見てたら、ハナの内は煙が出てたけど、今、赤えものが見え出したから、そりゃあ事によったら消した方が良いんじゃないかナ」短七は慌てて袂の火を消し、「こんなに焼け焦しが出来たじゃねえか、こんなのは、事によらなくても消した方が良いに決まってるじゃねえか、バカ！聞抜け！」、「ほら、そんなに怒るじゃねえか、だから教えねえ方が良かった」。実に上手く出来た噺だと思います。

「扇馬師匠の説明」

この噺は先代（五代目）小さん師匠から教えて貰ったと聞きました。只、扇馬師匠は途中、長さんが「短七さんの着ているその着物は、誂えたのかい？吊しを買ったのかい？」と訊きますが、小さん師匠の高座で、その台詞を聞いたことは在りませんが、その様に付けて貰ったのでしょう。扇馬師匠は、短七さんはある程度早口でも良いが、長吉さんは、妙にユックリ喋ってはいけない、間でもたせろ、と言っていました。そして、短七さんは、口では「お前えなんぞと気が合いやしねえヨ」とは言っていますが、何処かで気が合っているから、長く付合えるんだ、そこを忘れるな、だから本気で怒っちゃいけないヨ！とも言っていました、袂が燃えた時は、本気で怒ったでしょうネ。皆さんの周りにも、妙に気の合う友達がいるのでは！？

「落語豆知識」

※「明治維新と落語」

よく落語の起源を訊かれますが、時代としてハッキリしている事は、元禄時代、京都に露の五郎兵衛、大阪に米沢彦八、江戸に鹿野武左衛門と言う辻噺をする三人が現れたのを噺の祖とするのが一般的です。その後、江戸では、櫛職人の山生亭花楽（後の初代・三笑亭可楽）が、寛政拾年に、下谷神社で席を設けたのが、寄席の始まりとされています。それから七拾年、明治維新と成り、落語も江戸というごく限りの在る笑いから、薩長士などの、地方出身官僚、軍人などにも聴いて貰える滑稽噺へと移って行かざるを得なくなる中、寄席四天王と言われる、ヘラヘラの萬橋、ラッパの圓太郎、ステテコの圓遊、釜掘りの談志が現れ、場内を大いに沸かせました。その中を、三遊亭圓朝が登場するのですが、若い時分には、道具仕立の芝居噺を得意としておりましたが、後に手拭と扇子一本で演じる素噺を中心に、自作（又は翻案）による人情噺、怪談噺が大いに人気を博し、「牡丹燈籠」、「真景累ヶ淵」、「塩原多助一代記」、又皆様ご存知の人情噺「芝浜」は、圓朝師の三題噺から誕生したものです。圓朝師匠を「落語中興の祖」と呼

ぶ事に、異を唱える方は無いと思います。その後の落語界にも、浮き沈みは在りますが、この貳拾年ほどは、何とか人気も安定している様でホッとしております。又、次号をお楽しみに。



下谷神社

出典：[https://ja.wikipedia.org/wiki/
http://shitayajinja.or.jp/story](https://ja.wikipedia.org/wiki/http://shitayajinja.or.jp/story)